

---

# 高校アニメ製作部

yukaringo

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

高校アニメ製作部

### 【ZPDF】

Z5597D

### 【作者名】

yukaririn go

### 【あらすじ】

アニメ製作部のチラシを拾ったユズキが、製作部の男子たちに巻き込まれていくギャグ+ほのぼの×恋愛の物語。たまにドキドキあり。

## 第一話 駐れ駐れしい人

私の名前は安藤ユズキ。

超平凡な高校一年生。

だけど・・・超平凡だから、部活動も超平凡というわけではなかった。

そう。それはたった一週間ほど前の、入学式のことだった。

私は、入学式が終わって軽い自己紹介も終わったので、家に帰ろうと校舎を歩いていたときだった。

ヒラリと、私の足元にチラシのようなものが落ちてきたのだった。私はそれを拾い上げ、声に出して呼んだ。

「希望するおもしろい部活がなく、帰宅部決定になりそうな人はチラ！今は使われていない放送室でお待ちしています・・・」

そのチラシは、私にとっては好都合だった。親には「帰宅部は避ける」とうるさく言われていたが、希望する部活がなかつたから。

私は、さっそく使われていない放送室へむかつた。

しかし、放送室のドアには、「来週の月曜日（つまり、この日から一週間後）まで休業です！新しく入る人は、待つてね！」という張り紙が張つてあつた。

その日の私は、仕方ない、待つかと考えていたけれど。今となつては、待たないほうが吉だつた。

そして現在。私は放送室の前にいる。

そして、パイプ椅子に腰掛けた男子が言う。

「ようこそ、期待の新人君！」

私はすべての疑問に首をかしげた。

「あなたは誰ですか」

パイプ椅子に腰掛けた男子と、周囲にいた男子たちが目を丸くし

た。

そして、周りにいた男子その一が、私に言った。

「あー、君。人に名を聞く前に。自分から名乗つたらどうかね。」

「あ、すいません。一年の、安藤ユズキです。で、あなたたちは誰ですか？」

私はパイプ椅子に座っている人を見つめた。

「む、む、ゴホン。私は2年の園村マキだ。よろしくな、ユズキ。」

いきなり呼び捨てなんて、なれなれしい人だなあ。

そうすると、男子その二が言った。

「あー、マキねえ、動搖してるんだよ。自分が世界一有名だと思つてるから。」

「へえー・・・で、あなたは誰？」

すると、男子その一はちょっと引き下がつた。

「2年の東カオル。」

私は向きを変え、男子その一に言った。

「で、あなたは？」

「あ、俺？2年の空野カイ。よろしくな、ユズキ！」

「ああ・・・よろしくお願ひします」

私は、この人たちはどこまでも馴れ馴れしいなあと思つた。

「自己紹介は済んだか？よし、じゃあ、我々の部活動の説明をするから、よーく聞け。」

マキ先輩が言った。

そういえば、何をする部活なのか聞いてなかつたな。

「大雑把にいふと、この部活はアニメをつくる部活だ！」

「なかなかの暇つぶしになりそうですね」

私が言つたとたん、マキ先輩、カオル先輩、カイ先輩の顔つきが変わつた。

そして、カオル先輩は私を指差しながら言った。

「ユズキいい！！！！！貴様、何を言つたのかわかっている

のかあああ！…

「え？」

次に、カイ先輩も私を指差して言った。

「ゴズキいい！！！！！さつき言った言葉をもう一度言ってみろーーーー！」

「え・・・なかなかの暇つぶしになりそうですね、と・・・」

そして最後に、マキ先輩が私を指差して言った。

「その考えが間違っているのだああ！！！！！ただの暇つぶしではなく！！まじめなアニメ製作部なのだああ！！！！！」

「はあ・・・すみません」

その時だった。

放送室のドアが開いて、3人の男子が入ってきた。

そして、私を指差していたマキが、その三人に言った。

「遅かつたではないか！」ちらり、一年の安藤ゴズキだ！入部が決定している！」

三人の内で一番背の小さい男子（おやじくー43cmくらい）が、私に向かって歩いてきた。

「あ、一年の安藤です。よろしくお願ひします」

「二年の初山楓だよ、よろしくね。杏仁豆腐さん」

その会話に、3人の中でも一番背の高い男子が割って入った。

「俺、一年の終冬馬。よろしくな、杏仁豆腐」

「はあ。よろしくお願ひします」

そして、残りの男子が私に言った。

「2年の広山櫻。」

「よろしくお願ひします・・・

私がパイプ椅子に腰掛けると、マキ先輩が私にペンを握らせた。

「何するんですか？」

「ゴズキがどれだけ絵がうまいか確かめるんだ。何でもいいから、

書いてみろ」

「あ、はい」

私は、小学生のときに思いついたオリジナルキャラクターをかいだ。こんな感じで、こんな感じだつたはず。

「でももつた」

私が絵をみせると、楓先輩が身を乗り出してきた。

す」——い！杏仁豆腐さん、うまい——い！」

本当に一年生なのかな、この人。

「ハヤニちゃん！ 桃仁豆腐！」 と、冬馬先輩

私事

「合格つて？」

「決まっているだろ？ 今日からユズキがアニメの絵を描いて、昼

「同ドリマニス」。即ち、Rマサキ

「あ、その呼び方、やめてください。・・・だつて、私、この程

の総じたたけせんよ」

「絵の担当は俺だから……杏仁はアシスタント」

「その呼び方、やめてください！！」

「なんでー?かわいしよー?」と  
楓先輩

そ二だ」「かわいしそ!」と冬馬先輩

そんなところで、私には「杏仁豆腐」が定着してしまったことかが、なぜか理由」と、先輩

## 第一話 櫻の本性

昨日は、本当に疲れた。  
アニメ製作部の人たちに変なあだ名つけられるし・・・もう、最悪。

私、安藤ユズキは俯きながら廊下を歩いた。  
その時、放課後を告げるチャイムがなつた。  
そして、私はそのチャイムと共に、マキ先輩の脅し文句を思い出した。

「おい、ユズキ！私の父はこの学校の理事長だ！もし放課後に来なかつたら、この学校に居られなくしてやるぞ！」

追い出されるのは困る。この学校は、我が家の財産でようやく通える学校だったから。

私は、嫌々ながら放送室のドアを開けた。

そこには、左から楓先輩、櫻先輩、マキ先輩、カオル先輩、カイ先輩、冬馬先輩の6人がそろつっていた。

「遅いぞ！ユズキ！」と、マキ先輩。

「はあ・・・すみません」

「そうだー、遅いぞ、杏仁ー！」と、冬馬先輩。

「その呼び方はやめてくださいー！」

私と冬馬先輩の取つ組み合いに、マキ先輩が割つて入つた。

「あー、ユズキ！櫻の手伝いをしてやれ。」

「あ、はい。」

私はパイプ椅子を櫻先輩のところまで引っ張つていつた。

「あの、櫻先輩。私は背景を担当していいですか？」

「ああ、うん。頼む」と、櫻先輩。

昨日、マキ先輩から聞かされたのだけれど。私たちが作るアニメ

のストーリーは、男の子のルディ（マキ先輩）が、不思議な国に迷い込んでしまって、その国に同じく迷い込んだ男の子のルーシイ（カオル先輩）と力をあわせてその国から脱出するというお話りしい。ちなみに、楓先輩は出てくるウサギで、カイ先輩は意地悪な馬、冬馬先輩は鍵を握るお姫様なんだそうだ。

「そういえば、櫻先輩はアテレコしないんですか？」

私がそういったとき、櫻先輩は手を止めて固まってしまった。

「あのー、櫻先輩？」

櫻先輩は、話そうとしない。

そこに、楓先輩がやってきた。

「あのねー、杏仁豆腐さん。櫻ちゃんは前のアテレコでかんじやつたから、それがトラウマにー・・・・」

楓先輩がまだ言いかけてるときに、櫻先輩は楓先輩の口をふさいだ。

「かんじやつたんですか」

「・・・・・うん・・・・・・・・・」

櫻先輩の自信なさげな声に、笑ってしまった。

櫻先輩は落ち込んだのか、俯いて再び絵を描き始めた。

でも、その顔はかすかに笑っているように見えた。

マキはアテレコ室のガラスに張り付いて、櫻とユズキを見た。

「何か仲良くねー？ あの二人・・・・・」

「そうか？」と、カオル。

「でも、お友達だから、仲いいのはいいことだよねえ。はやく打ち解けてもらいたいしねえ」と、楓。

その言葉に、マキの瞳が輝いた。

「そつかあ！ お友達かあ～」

「どうした？ マキ」と、カイ。

「お友達って言うことで、安心したんじゃねーの？」と、冬馬。

マキは、スキップをしながら鼻歌を歌っていた。

## 第二話 入部希望者、現る！

昨日も、じつと疲れた。

アニメの絵は宿題になるし、定着した杏仁も消えないし。でも、ひとつわかつたことがある。櫻先輩も、以外にドジだといふこと。思い出したらまた笑えてきて、私は隠れ笑いをした。

朝八時三十分。

私、安藤ユズキはアニメのアイディアを考えていた。

その時だった。

「あーんびーさんつ

「・・・はい？」

クラスの子だった。名前は未冬。未冬ちゃんだった。

「安藤さん、あなたはアニメ製作部に入ってるんだよね？」

「うん。」

「うらやましーい！ねえ、安藤さん。頼みごどがあるんだけど。ちょっとといいかな？」

「・・・・・はい？」

未冬ちゃんは目をキラキラ輝かせて、私に言った。

「あたしも、アニメ製作部に入ってくれないかなっ！」

中休み。

私は一年のA組に行つた。

遊びに来たわけではない。未冬ちゃんの入部について、部長の園

村マキ先輩に相談しに来たのだ。

私が姿を見せると、マキ先輩は満面の笑みで手を振つた。

「よおおおー杏仁ー！」

「その呼び方、やめてください。」

一年生の人たちが、私を好奇の目で見てゐる。しかし、私はかま

わず続けた。

一年生から、入部希望者が出ているんですけど・・・」

「入部希望者！？それはなんだ！？」

「ギギーは未冬ちゃんがしたよ。」は目をギギギギー粼がせた  
私は、どんなだ！？と/or言わても困るだけだったので、未冬ち

やんを部活メンバーたちと面接させた。

未だちやんは緊張の「キ」の声も無こなつで、二二二二二ながら

一方的にお喋りしていた。

矢張り、いきなり通りに見えたが、面接終了後、部活メンバーやちは私

「ダメ……アイツ、設……と、マジ先輩

「同じく……」と、カイ先輩。

「以下同文・・・・・」と、冬馬先輩。

「・・・・ダメ・・・・」と、力オル先輩。

「僕も、すごく疲れたあ」と、楓先輩。

「…………」ノーノメントは、櫻先輩。

マキ先輩は私を指差して言った。

「コズキ……お前、あの皮膚ゆとかいう子に言つといてくれ。」  
入部はあきらめろ……。

私は素直に驚いてしまった。

「お前しか居ないだろ？」「と冬馬先輩。

「でも……かわいそうじやありませんか?」

櫻先輩は、私に言った。

「じゃあ、その子にいつてやれ。アニメ製作部の男たちは、カツラをかぶつたヤツのハゲヅニ……！」

三

櫻先輩以外の人が、「ヤメテーーー」という顔になつた。

「そうですね、わかりましたー。」

私は放送室を飛び出して、未冬ちゃんのもとへ向かった。  
私がカツラのことを未冬ちゃんに暴露すると、未冬ちゃんは入部  
を取り消した。

そして私が放送室にもどると、五人の鬼がたつていた。  
私に明日は訪れるのかなあ・・・。

## 第四話 記憶消失のチャーチート

五人の鬼に襲われたけれど、何とか生還することができた。

私の心中は、未冬ちゃんに申し訳ないという気持ちでいっぱいだった。でも、櫻先輩直伝の誤魔化しで、なんとか傷つけずにすんだ。

私はかなり安心した。未冬ちゃんが泣いちゃうんじゃないかなあとか思っていたから。

私が安心しきっていると、お昼の時間がやつってきた。

「未冬ちゃん、一緒にお昼どう?」

未冬ちゃんは、黙つて扉のほうを指差した。

「?」

私が、未冬ちゃんが指差した方向を見ると、そこには上級生らしき女子が三人。何のようだろ。

女子一「ちょっとそれ、来てもうひとついいかな」

「・・・?はい」

呼び出されたところは体育館裏。いかにも、つて感じだ。

女子三「あんたさあ・・・マキ君の何なわけ?」

「へつ!?

女子二「ただの取り巻きなの?彼女なの?」

取り巻きでも彼女でも無い。ただの部活仲間だ。やつと状況が理解できてきた。つまり、

私がマキ先輩のクラスへ行く。女子三名が勘違い。

「取り巻きでも彼女でもないです。マキ先輩とは、ただの部活仲間です」

女子たちが顔を見合わせる。少分、勘違いしたこと恥じているのだろう。しかし、

女子一「へえ・・・でも、クラスとかには押しかけないほうがいいよ。勘違いしないでよね?あんたがマキ君の特別なわけじゃない

んだから

そういう残し、女子たちは去つていった。

私は腕時計を見た。もつ、ほとんどお腹(はら)を食べる時間が無い。  
い。

私はダッシュで教室に戻つた。

放課後。私は放送室にやつてきた。

早く来すぎただろうか。放送室には誰も居ない。

それにしても、おなかが減つた。お腹は、ほとんど何も食べてい  
ないから・・・。

先に絵を書いていよがかな、と思つて、机にかばんを置いた。

「・・・・・あれ？」

机の上には、チョコレートの箱があつた。

私はその箱を開き、中を見る。おいしそうなチョコレートが並んで  
いる。

私はなにも気にせずに、おいしそうなチョコレートを口に入れた。  
チョコレートをかんだ瞬間に、私の意識は遠のいていった。

マキとカイ、冬馬、櫻、カオル、楓たちは、少し放送室に行くの  
に遅れていた。

掃除が長引いたからだった。

「あー・・・平凡な高校なのに、なんでこんなに廊下が長いんだ  
？理事長の息子ー？」と、冬馬。

「知らん。設計した人に文句を言つてくれ

「もう走るの疲れたあー。どうにかして、理事長の息子さん～  
と、楓。

「お前はもう少し体力をつける。」

「廊下を長くする金があるなら、もう少し学費を抑えてもいいだ  
ろ、普通。」と、カイ。

「同感だ・・・・・と、カオル。

「それに対しては同感だな。」

マキたちは長い廊下（無駄に）を左に曲がり、放送室の扉を開けた。

「すまんゴズキ！ おそらくなつ……」

放送室に居たのは、眠りこけたゴズキ（通称杏仁豆腐）だった。カオルがゴズキにかけよる。

「ゴズキ！？」

「ん……」とゴズキ。

ゴズキはむくつと起き上がり、マキたちの顔を見ながら目を細めた。

「杏仁豆腐さん？」と、楓。

「うるさいな……」と、ゴズキ。

ゴズキの言葉が発されたとき、皆いつせいに同じリアクションをとった。

「！？！？」

ゴズキは面倒くさそうに椅子に座り、机をバンバンと叩きながら言つた。

「誰か！ お茶もつてこい……！」

すると、カイが小声で、

「やばいぞ！ ゴズキの人格が反転している……」

「ゆずちゃん、こわい……」と、楓。

「あ……あれ、ポンポンチョコレート……？」

マキは、机の上にあつたチョコレートの箱を指差した。

「ゴズキ……あれ、食つたのか……」と、冬馬。

「ポンポンチョコレートで酔つた人、初めて見た……」と、櫻。

ゴズキは待ちきれなくなつたのか、両腕を振り上げながら襲い掛かってきた。

「はようお茶用意せんかい……！」

「うおおお！？？」

襲い掛かってきたと思いきや、ゴズキはへろへろと冬馬の上にか

ぶけつた。

マキは皿を落とした。

「ねてる・・・?」

「寝てる。」と、タモリ

タ馬はコズキの寝顔を見ながら、微笑んだ。

## 第五話 ユズキの手作りカレー

私は、頭痛で目が覚めた。

それについても、何で自分の部屋に居るのががわからない。両親は海外出張でいなければだから、帰られるわけがない。

確かに私は放送室に居て、机の上のチョコレートを食べて、その後に眠くなつて・・・。

眠くなつたあたりから、記憶が途切れている。

私はベッドから起き上がり、時計を見た。　・・・もうすでに、学校の門が閉じている時間帯だ。

笑える。

「ウアハハハハハハハハ！」

さつきもお話した通り、両親は海外出張でいなく、私一人なのです・・・一人なはず。

私は用心深く階段を下り、手には木刀を持っていった。

「アーリー、おや二郎、二郎、マニエ。

「ウアハハハハハハ！！見ろ杏仁！マ

・ウアハハハ！！』と、カイ先輩。

「杏仁さん、お菓子ないのー？」と、楓先輩。

「杏仁!! フィーデオボリ は無いのか!!」 と、力水先輩

「杏仁・・・すしの出前を・・・」と、櫻先輩。

「・・・・何やつてんですか！不法侵入ですよ！それと、カイ先輩もマイケルとジャクソン君の漫画をしまってください！」

皆、やりたい放題。

それに、散らかし放題。

「杏仁さん、お菓子・・・」

「黙つてください」

私は楓先輩に軽く笑いかけた。

「自分の食べたいものとかを要求する前に…散らかしたもの片付けてください…！」

「えー」と、部員（櫻先輩除く）。

「片付けないと、家からつまみ出しますよ？」

私が言つと、部員たち（今度は櫻先輩介入）は部屋を片付け始めた。「あと、晩御飯は私が作りますから。できるまで待つてください。

楓先輩とマキ先輩が目を輝かせた。

私はキツチンへ向かい、簡単なカレーでも作ることにした。

幸い、材料は冷蔵庫にすべて入つていたので、私は早速きり始めた。

「あつ」

しまつた。野菜を千切りにしてしまつた。

「ああつ」

しまつた。肉を焼いてしまつた。

「あああつ」

しまつた。ルーを全部入れてしまつた。

「ああああつ」

しまつた。カレーのそこが焦げてしまつた。

そんなこんなで、私の手作りカレーが出来上がつた。

「はい！召し上がる」

マキ先輩たちは怪訝そうな顔をして、カレーの入つた皿を覗き込んだ。

「おい、杏仁……イモ、ちゃんと入れたか?」と、マキ先輩。  
「え? 入れましたよ? もしかしてとけちゃつてます?」  
「おい、杏仁……カレーに油が浮いてるけど……」と、力  
オル先輩。

「あー、お肉、間違えて焼いちやつたんですよ。」

「杏仁……カレーがすゞぐドロドロだけど」と、カイ先輩。

「あー、ルー全部入れちゃつたんですよ。」

「杏仁……このカレー、苦いぞ」と、冬馬先輩。

「あー、焦がしちやつたんですよ。文句あるなら、食べなくていい  
ですよー」

「いえ! ないです!」と、部員たち。

私はおいしそうに(無理して)食べてくれる先輩たちを見守つ  
ていた……。

## 第六話 アテレコ「テビゴー」+冬馬の心境

「すみません、昨日は私のせいです。」

私はマキ先輩たちに頭を下げる。

心配要らない」とて「おや」とカイ先輩

1

「テレコすんだからな。」と、マキ先輩。

「何驚いてるんだ？」と、カオル先輩。

「そりや、驚きますよ！私みたいなド素人がアテレコなんて・・・

と、冬馬先輩。

「なんだって放送まであと一週間しかないからねえ」と、極先輩

ええ！？？」

杏仁の役は、杏、つていう女の子の役だ。まあ・・・悪役かな。  
ト、擧先輩。

「でもまあ

課後、放送室でな」と、マキ先輩。

そんなあ・・・・私がアテレコなんて・・・。

中休み。私が朝のショッキングな出来事でうなだれないと、未冬ちゃんがやってきた。

「やんかせ」てきた

「安藤さん・・・」

「んー・・? なあに?」

「ちゅうと、ここでは言えないから……」  
未冬ちゃんはグラウンドを指差した。

体育館裏。

「……何？私、未冬ちゃんに恨まれるようなこと、した？」  
「私ね、昨日見ちゃったんだ……と、未冬ちゃん。

「……何を？」

「安藤さんが、冬馬先輩に抱きついていたんだ！」

「…………？」

「……何！？冬馬先輩が私に抱きついたんじゃなくて……？」も  
しかして、チョコを食べて意識が喪失したとき……？  
「私ね……冬馬先輩のこと、好きなの」と、未冬ちゃん。  
「へえ……」

「安藤さんは……？」

「好きじゃないよ。」

未冬ちゃんの顔が明るくなつた気がした。

「……かといって嫌いでもないし、好きでもない。友達以下、  
知り合い以上つてとこかな」

「へえ……そつか。でも、抱きついてたのは……？」と、未  
冬ちゃん。

「ちゅうと……具合が悪かつただけ。勘違いさせないもんね」  
未冬ちゃんは笑顔で去つていった。

冬馬は、軽いショックを受けていた。

体育館裏で、ユズキと未冬の話を聞いてしまつたから。

何で傷つくのかも冬馬は自覚なしだが、多少はムシャクシャして  
いるようだ。

「どうしたの？冬ちゃん」と、楓。  
「いや……なんでも……？」  
「杏さん？」

「ペリル！？」

楓はにじりとわらう。

「終りやんか変な言葉を使い」とか、図星を突かれて困っているときへ

「ホントにすきなんだねえ、杏ちゃん!」

- 10 -

楓は何も起らなかつたかのようだ。冬馬の前から去つていつた。

## 第七話 ブラックモード、発動

昨日は、すこく疲れた。

アテレ「」することになっちゃつし、放課後に先輩たちにじかれるし。

私は通学路を通りながら、桜を眺めた。

「あ！杏仁「豆腐さんだあ～」

うげ。楓先輩。

「おはよう」

「おはよう～」

昨日は、楓先輩も厳しかつた。この人は、二重人格なんじやないだろうか。

「そういえば、楓先輩はこの辺に住んでるんですか？」

「そうだよお～。あの辺かなあ～」

「結構近いですね」

「そうだねえ～。今度遊びに行つてい～い？」

「昨日の記憶が頭によみがえる。

そして、私は笑顔で言つた。

「散らかさないなら。kですよ。」

「うん、約束ね～」

私は下駄箱のほうへ行き、靴を履き替えよつとした。

「あ・・・」

私の下駄箱の中には、一通の手紙があつた。

「どうしたの？杏仁「さん・・・」

運悪く、楓先輩が現れた。

「なあに？それ・・・」

「あつ」

楓先輩のブラックモードが発動し、楓先輩は下駄箱に入つていた手紙を取つた。

楓先輩は、手紙を読み上げ始めた。

急な手紙で驚かせてごめん。

安藤に、話したいことがあります。  
時間があれば、放課後に体育館裏まで来てください。

「べただねえ～・・・」

「・・・楓先輩？」

「ばつさり断りなよお。無名だし」

「あ・・・はい。放課後は部活もありますし・・・できるだけ早く終わらせますね」

楓先輩のブラックモードが解けた。

「うん!まつてるからねえ～。早く行こお～」

「はい」

中休み。

私がゆつたりと読書をしている時だった。

ズパアアアアアン!

「コズキイイイイイイー！」

急に教室のドアが開き、部員（楓先輩と櫻先輩除く）がやつてきた。

「なつ、何ですか先輩方」

「何ですかじゃないだろコズキイイイイイー！」と、マキ先輩。

「お前がラブレターもらつたつて話が！！」と、冬馬先輩。

「もういましたけど・・・ダメですか？」

「待ち合わせの時間はいつだ！？」と、カオル先輩。

「え・・・放課後、ですけど」

「よし、殺そう！部活の時間を邪魔するやつは殺そう！」と、カイ先輩。

「そりだあー、殺すぞーう！」と、マキ先輩。

「ま、待つてください。私がちゃんと断りますから、その・・・えーと、こういう時つてどう言えばいいんだっけ？・・・余分じやなくて・・・えーと・・・・・。

あ、思い出した。

「余計

部員たちが硬直した。

「なことはしなくていいですよ」

「ユ・・・

「はい？」

「ユズキのバカアアアアアア！－－－！」

マキ先輩、カイ先輩、冬馬先輩、カオル先輩は走り去つて行つた。  
私はそれを、口を開けて見送つた。

## 第八話 悪魔の呼び出し（前書き）

悪口や文句は受け付けませんが、感想などはお送りください  
いへへ

## 第八話 悪魔の呼び出し

先輩たちが何で怒っていたのかもわからず、「放課後がやつてきた。

私は教室を後にし、体育館裏にやつてきた。  
しばらく経つた。

だけど、呼び出してきた相手は来ない。

私は諦めて、体育館裏から離れようとした。

「あ～・・・安藤さん～・・・帰っちゃうの～・・・?」

私は声の主の顔を見た。

ドクロ。

ドクロの仮面。

私は飛び退きそうになつた。

「あ・・・すみません。」

「いえいえ～・・・ウフフフフフ」

ドクロの仮面（性別不詳）さんは、不気味な笑い声を立てた。

ドクロの仮面さんが、私に何のようだりつ。

「用ですか～？アリアリですよ～・・・ウフフフフ」

ドクロの仮面さんは、ガサガサと黒いマントを漁り始めた。

「科学部で発明した、このチョコレートの感想を頂きたいんです

よ～

「へ?」

よく見ると、それは見覚えのあるチョコレート。

あの・・・食べたら意識を喪失するチョコレート・・・。

「安藤さん、これを食べたでしょ～・ウフフフ・・・味はどうでした？」

「え・・・覚えてません」

ドクロの仮面の黒いマントさんは、「はあ」とため息をついた。

「お酒と砂糖と塩とコショウとソースとケチャップとカラシとワ

「サビと醤油に弱いんですね」・・・

「え！？？」

「どうもしました？」

「・・・お酒と・・・何ですか?」

「お酒と砂糖と塩とコショウとソースとケチャップとカラシと

卷之三

— ! — ! — ? — ? — ? — ? —

「まあ お酒を主にたくさん入れましたからねえ～・・・酔つて当

然ですね」

「まあ酔つていいんで」と

ねえ、  
・  
・  
・  
上

一では部活があるので、これで失礼します」

フジタ・アーティスト

「はい。渡しておきます」

私は無愛想は受け取ってから体育館裏を離れた

「山田洋次」と書いたのである。藤井先輩つとめの

のか。

私は校舎の時計を見、ダッシュで放送室に戻った。

「おッそい！！」

私は、先輩たちにい

私は先輩たちにいゝせありひとぐ怨られた。  
「どう、どうもバラーラー、う一壁うりミナニ。」

• • ג'נ'ר'

私は、先輩たちに藤山先輩からもらつたチョコを手渡した。「うわあああい、ありがとう杏仁豆腐さん！」と、楓先輩。

「うまいぞ、杏仁！」と、マキ先輩。

「ハ・・・ハハ・・・」

良かった、ソースとか入つてたのは私のだけみたいだ。

私が胸を撫で下ろそうとした瞬間、

ドサッ

チヨコを食べた先輩方が、全員倒れた。

「先輩！？」

私が先輩方をゆすると、先輩全員が面倒くさそうに椅子に座つて

言った。

「お茶もつてこい！」

## 第九話 鼻血事件

「ストーカー？」

マキ先輩たちは、眉間にしわを寄せて言った。

「ええ・・・確証は持てていなんですけど、そんな感じがするんです」

マキ先輩は、マイコップにマイティーオーを注ぎながら言った。

「そうか・・・ならば仕方が無い。24時間ユズキについて回らねば」と、マキ先輩。

「そつちの方がストーカーじゃないですか」

「いいのかー？まだアテレコ終わってないぞー」と、マキ先輩。

「・・・・・・・

私は黙つて、家から持参したインスタントコーヒーを飲んだ。放課後の放送室は、外から見ると楽しそうに見えるかもしが。こちとら全然楽しくない。むしろ悲しいと言いたいくらいだ。昨日は最悪だつた。藤山先輩を本気で恨んだりしたな。

酔つ払つた先輩たちをたたき起こすのに何分かかったか。

「ストーカーねえ・・・年頃の女の子の被害妄想じやねえの？」  
と、冬馬先輩。

「それも考えたんですけど・・・まあ、確証は持てていませんし・・・

「もしストーカーがいたら、どうするの？」と、楓先輩。櫻先輩と楓先輩除く四人は、しばらく間を置いて言った。

「殺る・・・！」

「だよねえ〜〜〜

私は「一ヒーを吹き出しそうになり、むせた。

「げえほ、げほつ、櫻先輩はどうします？」

櫻先輩の顔に影がかかつた。

「殺る・・・！」

「だよねえ～～～」

やばい。鬼病は櫻先輩にも感染している！

私はチヨコの山（藤山先輩 + 科学部員作）を見た。

「それより・・・あのチヨコどうするんです？」

「埋め立てるか」

マキ先輩が立ち上がった。

「それもそうだな」と、カオル先輩。

「俺も賛成」と、カイ先輩。

「ホラ、杏仁も行くぞ」と、冬馬先輩。

「あ、はい。」

「僕も行く！櫻ちゃんもいこお～」と、楓先輩。

「ああ、うん」と、櫻先輩。

全員が放送室から出ようとすると、マキ先輩が制した。

「いかん！廊下歩行は守らんといかん！みんな一、一列になれー！」と、マキ先輩。

「マキさあ・・・」の前廊下は知つてなかつたつけ」と、カオル先輩。

「私は生まれ変わったのだー」と、マキ先輩。

「知つてました？廊下歩行つて、廊下で騒がないことも入つてるんですよ」

全員は、一列になりながら沈黙した。

埋め立て、終了。

「疲れましたねえ」

「ふう～、つつかれたあ～～」と、楓先輩。

「何でこんなにチヨコレートが・・・」と、カイ先輩。

「なんというか・・・鼻血が出そうだ」と、マキ先輩。

「だ、出すな！誰か、ティッシュ！～」と、カオル先輩。

「あ～・・・俺も、鼻血出そう」と、冬馬先輩。

「ほい、ティッシュ」と、櫻先輩。

「おお～～～サンキュー櫻～～～」と、マキ先輩。

「フガツ、やばい・・・鼻血のくしゃみでそう」と、冬馬先輩。

「ギャアア！…ヤメロー！誰か、奴のくしゃみを阻止しろおお」

と、カオル先輩。

「え？」

ブアツクショーン！！

・・・・みんな、血だらけ。

冬馬先輩は、私含む六人に血祭りに上げられることになつたとさ。

## 第十話 ストーカーの正体 + お泊り

冬馬先輩鼻血事件の翌日。

「やつぱり、ストーカーですよ」

私除く部員たちは、怪訝そうな顔をした。

「昨日帰る途中に見たんですよ。チラッとしてけど、電柱の後ろに……」

マキ先輩は立ち上がった。

「よし、いっつたら杏仁の家にお泊りするしかないぞ……」と、

マキ先輩。

「待つてました……」と、楓先輩。

何でそうなるのが不明だ。

「え～と……アテレコは……」

「何を言つている！アテレコなんていつかでいいよ」 と、マキ先輩。

「アテレコはもう少しで終わるんだよお～～。だからいいんだよ

～と、楓先輩。

「そうだぞ！アテレコより部員のほうが大事だからな……」と、冬馬先輩。

「……別にいいですけど。冬馬先輩？」

「なんだ？杏仁」と、冬馬先輩。

「家の布団とかに鼻血たらさないでくださいね」

私は、笑つて続けた。

「もしもたらしたら、家からつまみ出しますんで」

「は、はい。」と、冬馬先輩。

そこに、カオル先輩が割つて入つた。

「杏仁！ストーカーはどんなやつだった！？」

「ストーカーですか……チラッと見えただけですけど、黒っぽ

「いものが見えました」

「背は？」と、カイ先輩。

「私より高いです。180・・・・くらいかなあ」

「ううむ・・・・と、カオル先輩。

「心当たり、ありますか？」

「藤山・・・・？」と、カイ先輩。

「ああ・・・・あの科学オタクですか。ストーカーとかしそうなフインキですよねえ・・・・」

みんな、絶句した。

「どうしました？」

「いや・・・・何でも・・・・」と、マキ先輩。

「何でもない、よお～」と、楓先輩。

「そうですか。ああ～・・・・泊まりに来るなら、ちゃんと用意してきてくださいね。パジャマとか、貸せませんから」

「じゃあ用意してくるねえ～」と、楓先輩。

「じゃあ、一回解散！集合は、杏仁の家だ！」と、マキ先輩。

「ラジヤツ」と、部員たち。

私は部員たちに手を振ると、放送室を出た。

そういえば、買い物にも行かなきやいけない。我が家には、ほんのちょっととの食材しかなかつたんだ。

大人数だし、お鍋とかがいいかな。じゃあキノコとか買わないと。

私は駆け足で学校を出て、登下校の道に入った。

鍋はいいけど、予算の問題だ。足りるかな。

前も言つた通り、私の両親は海外に出張でいない。そして、そのバカな親たちは生活費を全部持つていきやがつたので、我が家には金はあんまり無い・・・・なんというか、ある金はすべて援助金だ。私は石ころを思い切りけつた。

その石ころは、私の前のほうにあつた電柱に当たり、その電柱からドクロの仮面が顔をのぞかせた。

藤山（もうすでに呼び捨て）だつた。

「ストーカーはあなたですか」

「人聞きの悪い」と、藤山。

「何ですか？また、クソ不味いチョコでも食わせるつもりですか。

「いいえ、伝えたいことがあるんですよ」と、藤山。

「早く言ってください。あなたと喋つてると、イライラします」

「好きです！」

「…………え？」

「好きです！」

「ぐえぶツ！？」

「何じゃこいつは！いきなり抱きついてきたよ。

「あつ、痴漢はつけん

ズドガ！

飛び入り参加の楓先輩の飛び蹴りが、直に藤山に入った。

「大丈夫か！？杏仁！」と、マキ先輩。

「あのー・・・あれば藤山・・・ぐえぶツ」

何だこいつは。いきなり抱きついてきたよ。

「ああ！杏仁が痴漢に襲われている！」

ズドン！

カオル先輩のえぐるようなパンチが、マキ先輩の腹に入った。

「大丈夫か！？杏仁！」と、カオル先輩。

「あのー・・・あればマキせんば・・・ぐえぶツ」

こいつも何だ。いきなり抱きついてきたよ。

「大変だ！杏仁が痴漢に襲われている！」

メキヤツ

カイ先輩のパンチが、カオル先輩にめり込んだ。

「大丈夫か！？杏仁！」と、カイ先輩。

「あのー・・・あればカオルせんば・・・ぐえぶツ」

こいつら、何だ！？いきなり抱きついてきたよ。

「あ！杏仁が痴漢に襲われている！」  
ドギヤン

冬馬先輩の飛び膝蹴りが、カイ先輩を吹っ飛ばした。

「大丈夫か！？杏仁！」と、冬馬先輩。

「あのー・・・あればカイせんぱ・・・ぐえふツ」

ホント、何だ！？いきなり抱きついてきたよ！

「ボル スキック！」

ズガガガ

櫻先輩のボル スキックが、冬馬先輩を大変なことにした。

「大丈夫か、杏仁」と、櫻先輩。

「あのー・・・あれば冬馬先輩です」

「え」と、櫻先輩。

あたりを見渡すと、残骸が転がっていた。

楓先輩は、飛び蹴りの勢いを止められずに、遠く離れたところに転がっていた。

「あの・・・みなさん、そろそろ夕食にしませんか？」  
残骸たちがよみがえった。

## 第十一話 姉との再会

「ただいまー」

私が、買出しから帰ってきた時のことだった。

「おかえりーー！それと久しぶりーー。」

久しぶり・・・？

私は、私に挨拶を言った人の顔を見た。  
それは、どこか見覚えがあつて・・・。

「お姉ちゃん！ー？ー？」

「いやー、ホンマ、うちのゴズキがお世話になつてー・・・」  
姉。

「へへへ。そんなことないよおー。杏[え]さんはたまーに酔つち  
やうじもあるけど、酔わなかつたらとつても可憐[これん]くてやせしーの  
ー」と、楓先輩。

「何やー、杏[え]」。自分、何食つて酔つたん？教えてやー」と、姉。

「お姉ちゃんまで、杏[え]つて言つて言つてやめてよ・・・」

「あはは、スマシスマシ。ほんでゴズキ、自分、何食つて酔つた  
ん？」と、姉。

「ボンボンチョコ・・・

「ブツ」と、姉。

「・・・・・お姉ちゃん。鍋作るんだけど。手伝ってくれない？」

「いいで。自分一人やつたら心配やしな。」と、姉。

「何その言い方。私の料理が心配なら、お姉ちゃんだけ食べなく  
てもいいのよ」

「だつて自分・・・その料理でワシを殺しかけたことあるやん。  
と、姉。

藤山含む、周りにいた全員が吹きそつになつた。

「それは六歳の頃の話でしょ！？もう！大体、何で家出した人がここにいるのよ！」

「あー・・・それやけどな。ワシ、男引っ掛けすぎて、行き場なくなくなつてん（笑）」と、姉。

「バカ！」

「さすが安藤さんのお姉さんですね～・・・」と、藤山。

私は、反射的に飛びのいてしまつた。

「何でここに藤山がいるんですか！」

「僕もここで泊りさせてもらうことになりました～」

「ストーカーと一つ屋根の下なんて嫌です」

私がそういうと、ひょこひょこと楓先輩がやつてきた。

「大丈夫だよお、杏仁さん。僕が一緒に寝てあげるから～

「なつ、何！？」

ソファで横になつっていた一人が、過剰な反応を示した。

「よ・・・よし！杏仁！私も一緒に寝てやろう！」と、マキ先輩。

「遠慮しておきます。下心丸見えですよ」

私はそう言い残して、キッチンへ向かつた。

「さつきお姉ちゃんは私の料理を馬鹿にしたけど・・・私が一人で鍋を作つて、上手くできたら、さつきの言葉は取り消してね。」

「おー。望むところや。」と、姉。

ちなみに姉の名前は、安藤クヌギ。三年前に家出した十八歳。姉が関西弁なのは、家出先が関西だったから。

何だかんだうるさいけど、昔はいい姉だった。  
昔は。

「召し上がりー」

私を除いた全員が、鍋を覗き込んで怪訝そうな顔をした。

「なあ、ユズキ・・・何をどうしたらこうなるん？」と、姉。

「え？買つてきた材料を入れただけですけど。」

「まあ・・・問題は味やからな。味で勝負や。」と、姉。

私を除いた全員が、底が深い皿に鍋の具を入れる。

「・・・異臭が・・・」と、カイ先輩。

「あ、そうですか？文句があるなら、食べなくてもいいんですよ

？」

「・・・杏仁は食べないのか・・・？」と、カオル先輩。

「さつき私、散々味見して、おなかいっぽいなんですよ。遠慮な  
さらずにたくさん食べてくださいね」

私を除く全員が、鍋の具と汁を口に入れた。

「どうです？我ながら力作だと思うんですけど。」

「安藤さん・・・あなた、科学部に入ることをお勧めしますよ。

この腕なら、きっと活躍できますよ・・・」と、藤山。

「お褒めの言葉はうれしいんですけど。生憎、ストーカーのいる  
部活は入りたくありません」

私は一刀両断した。

「どう？お姉ちゃん」

「・・・きつたまあ・・・」と、姉。

「？」

「妹に料理で殺されそうになつたの、これで一回田やでえーーー。  
来い！貴様を調教したる！」と、姉。

「え！？おいしくなかつたですかあー？皆さん！」

私の質問は、虚しく響いた。

## 第十一話 ノズキの好きな人？

「お風呂、空きましたよー」

私は、脱衣所から居間に向かつて叫んだ。

「おーう」と、マキ先輩。

後から、マキ先輩が返事をする。  
・・・こういう夫婦みたいなシチュエーションは、実は苦手。ち  
よつと照れる。

私が変な妄想を描いていると、

「マキちゃん、お風呂はいるのー？なら僕も入るー」と、楓先輩。

「・・・見た目は子供。カラダは・・・」

「マキ先輩、いやらしいこと考えてないで、とつととお風呂に入  
つてください！」

私はマキ先輩の爆弾発言を遮り、脱衣所を出た。  
脱衣所を出て早速、

「何や？いいフインキやーん」と、お姉ちゃん。

「マキ先輩とは、ただの部活仲間！お姉ちゃんも人の心配してな  
いで、彼氏でもつくれば？」

「そやなあ・・・。でも、ワシの美貌やからなあ・・・彼氏、何  
百人もつくれるんぢやう？」と、お姉ちゃん。

「・・・それ、男引っ越しすぎた事の言い訳？」

「ちやうぢやうー。わからんやつちやなあー、ホンマにー」と、お  
姉ちゃん。

「関西人は関西に帰れ。」

「実の姉に何やねん、その態度はー。口が悲しむでー」と、お姉  
ちゃん。

「ちよつとお姉ちゃん、口の話は・・・」

そのときだつた。

「口口って誰だ？」

「・・・カオル先輩・・・」

お姉ちゃんはさもおかしそうに笑つた。

「あー、聞いてないん? ハロひていつのは、コズキの好きな男や  
でえ」

「え・・・」

カオルは、一瞬耳を疑つた。

しかし、クヌギは確かに言つたのだ。

ハロは、コズキの好きな男だと。

「もー、お姉ちゃん!」と、コズキ。

そしてクヌギは、カオルの耳元でささやいた。

「何や、シヨツクかいな?」

カオルは、誰が見てもわかるほどに慌てた(コズキはわかつてい  
ません)。

「いや、全然そんなんじゃないすよー!」

「ホンマかいな?」と、クヌギ。

コズキだけが、事情を理解していらないらしい。

「もう、お姉ちゃん! 先輩のことからかうのやめてよ。・・・先  
輩、布団敷きに行きましょう」と、コズキ。

「ああ」

一階へ行き、カオルはコズキと布団を下ろした。

しかし・・・カオルはハロのことでもやもやしていた。

「なあ・・・コズキ」

「何ですか?」と、コズキ。

「ハロつて・・・」

コズキはほんの少し、頬を朱に染めた。

「ああ・・・ハロ、ですか。あだ名なんですか?、色々な事があ  
つて定着しちゃつて・・・ハロは大き目に言つと幼馴染で・・・  
お姉ちゃんが家出する前まで、ここにいたんですよ。・・・ながい  
間を共に過ごしただけあって、そりやあまあ色々ありましたよ。一

緒に散歩に行つたり・・・と、ユズキ。

「今でも好きなのか？」

「それはもちろん・・・『口はどうだか知りませんけどね。』と、

ユズキ。

そこに、  
クヌギが現れた。

「アロハ。」

「何や……知らんかったんかいな」と、クヌギ。

えりと先輩……何たと思つてたんですか？」とエヌキ

その口せ、口の話を何度も蒸し返される始めになつた。

## 第十二話 いじめる奴はフルボッコ

「先輩方へ、起きてくださいーー朝じはんでありますよー」

日曜日の朝八時。

朝じはんのホットサンドの香りが、一階に充満している。

「今日はホットサンドお？」と、楓先輩。

「おめでとうございます。大正解です。私が全部作ったんですよー

ー

「え・・・全部、つスか？」と、カイ先輩。

「ええ。昨日、お姉ちゃんに教えてもらつたんで、うまくできたんですよ。」

マキ先輩がいきなり立ち上がった。

「何をモタモタしてーー！ さつと着替えてホットサンドを食べに行くぞー！」

「おーー」と、楓先輩。

「・・・じやあ、早く来てくださいね。冷えちゃいますから

私は、先輩たちの寝ていた部屋からでて、階段を下りた。

「コズキ・・・」と、お姉ちゃん。

「？ 何？」

お姉ちゃんは、テーブルの上のホットサンドを指差して言った。

「何やねん、あの炭のカタマリは・・・」

「失礼ね！ あれはホットサンド！ 見た目はあれだけじ、味はおいしいんだから！」

「自分の味覚、信じられへん・・・。ま、問題は味やからな。」

その時、階段を下りてくる音がした。

「安藤さん・・・ホットサンドとこいつのはじりがーー！」と、

藤山。

「あ・・・ホットサンドはテーブルの上こ・・・」

「どうですか？」

私は、ホットサンドを指差して言った。

「これ。」

「……え？」と、藤山。

藤山はしばらぐ、目をこすつたりしていたが、もう一度私に聞いてきた。

「ホットサンドは、どれですか？」

「これ。」

「……え」と……この炭のカタマリが、ですか？」と、藤

山。

私は藤山の腹にパンチをめり込ませた。

「失礼ね！ ホットサンドだつて言つてんだろうがああ

「グツハツ、ぶううえつ」

そこに、先輩方計六人がやつてきた。

「おう杏仁！ ホットサンドはどれだ？」と、冬馬先輩。

「え？ テーブルの上にありますよ？」

「？ どれだ？ 杏仁」と、カオル先輩。

「えつと……これです」

私はテーブルの近くまで行つて、指差した。

「……もしかして……これ、か？」と、マキ先輩。

「はい。」

「えーと……この炭のカタマリが……」と、カイ先輩。

私はカイ先輩にパンチを食らわせた。

「ホットサンドにみえなくてすみませんねえ……人が気にしていることでいじめるのやめてくれませんか？」

「ひつ……ごめんなさい、すみません！ 本当すみませんでした！」と、カイ先輩。

私は、残る先輩たちに振り向いた。

「あ、こつちは取り込んでますので。気にせず食事をしてください

い

櫻先輩が、言った。

「この炭のカタマリを食べるのか？」

櫻先輩の断末魔の叫び声は、日本の一部に響いた。

## 第十四話 ゴールデンウイーク前の秘め事

4月27日、放課後の出来事。

「もうすぐゴールデンウイークですね～」

私は、窓際でたそがれるマキ先輩に話しかけた。

「…………」

返答はなし。

「アテレコも人通り終わりましたし……思う存分遊べますね～」

「…………」

返答はなし。

私は諦めて、カイ先輩に訊いた。

「マキ先輩、どうしちゃったんですか」

「連休って聞いたとたんにあんな感じになっちゃって……」と、カイ先輩。

「…………」居残り報告受けた小学生が、アイツは。

私は呆れて、マキ先輩を眺めた。

「マキ先輩？」

「…………」

もちろん返答は無し。

すると、楓先輩がちよこちよこと歩いてきた。

「マキちゃんはねえ、ゴールデンウイークに杏さんと会えないから、落ち込んでるんだよ～」

「パベロツ！？」

マキ先輩は変な声を上げた。

「楓、何を言う！私は部員に会えなくて暇なので落ち込んでいるだけで、別にユズキに限ったわけではないぞ！」

マキ先輩は必死で弁解を続けたが、みんなに白い目で見られた。

「…………」別にいいじゃないですか、会えなくても。ゴールデンウ

イークが明ければ、すぐに会えるんですから。」

「…………」

みんなが沈黙したときに、ヒヤ関西弁が割り込んできた。

「何やねん、男心のわからんやつちゃんあー。連休中も会つていないと気がすまないつていう男心をわかつてやれや、コズキ。」

「お姉ちゃん!/?」

「なんでここお姉ちゃんがいるのよ」

「何やねん。ワシもまだ18や。そりやあ学校も通つちゅうねん。」

「不法侵入じゃないの」

姉は私を無視し、マキ先輩に向き直った。

「自分の気持ちはようわかつた。だから……」

さらに姉は、マキ先輩の耳元で何かを囁いた。

マキ先輩はしばらく田をぱちぱちさせていたが、姉に向かつてうなずいた。

「もひ、お姉ちゃん。先輩に変なこと吹き込まないでよ?」

「変なことやあらへんでー。ああ、そのうちわかるから楽しみにしどき!」と、姉。

「な、何な?マキちゃん、教えて~」と、楓先輩。

「…………?」

「ホールディングイークが来ても、姉とマキ先輩の秘め事はよくわからなかつた。

もうすぐで、ホールディングイークがやつてくれる。

## 第十五話 ゴールデンウイーク一四四

姉とマキ先輩が何を企んでいるのかもわからず、5月1日がやつてきた。

5月1日、金曜日の午後3時。

私は買い物から帰ってきた。

「ただいまー」

私は買い物袋を玄関に置いた。

「・・・・お姉ちゃん、いる?」

私は玄関のドアを開けた。

「ああ、お帰りコズキ!」と、お姉ちゃん。

「お帰り~ユズキ!」と、マキ先輩。

居間には、マキ先輩もいた。

「あれ、先輩来てたんですか? 前もって言つてくれたら、ケーキとかつくつたのに・・・」

「やめとけ、自分絶対炭ケーキつくるやん。マキ君腹こわすで!」と、姉。

「・・・・お姉ちゃん、料理は一に愛情、二によい食材、三に腕、四に味よ。」

私はそれだけ言つと、マキ先輩に向き直つた。

「マキ先輩は何で居るんですか? 櫻先輩たちは?」

「ん?・・・ああ、実はだな、私の両親が一人で勝手に旅行に行つてしまつてだな・・・連休世話になることになつたのだ。」

「そうなんですか? でも、マキ先輩なら料理もそこそこできるでしょ?」

姉は笑いながら言つた。

「実はやな、ユズキ。マキ君、ユズキ以上に料理ができるへんらしいで!」

「そうなんですか？・・・って、お姉ちゃんは出かけるの？」  
「せや。ちよーっと用事ができてなあ。夜までには帰るで。ほな、  
そいならー。」

姉は家をもうダッシュで出て行った。

「あのー・・・マキ先輩。」  
「な、何だ杏仁？」  
「料理、教えましょうか？」

私はキッチンに、バーゲンで売っていた卵を並べた。

「いいですか？今からオムレツをつくります。マキ先輩、杏仁ちゃんはお料理できないと困りますよ？」

「はあ・・・」

「では、まずは卵を割ってください。」

「う、うむ。それっ！」

グチヨアツ

「あの～・・・マキ先輩？卵割るのは、別に額でなくとも・・・  
「う・・・うむ。今のは少し失敗しちだけだ！」  
「じゃあ、次はこっちの卵を溶いてください。」  
「うむ。それ！」

ビチャビチャビチャツ

「先輩！とんでます！..卵、とんでます！」  
「う・・・うむ。それで、この溶き卵をどうするのだ？」  
「はい、卵をこうしてこいつして・・・」  
「・・・そういうえば、杏仁って料理下手じゃなかつたか？」  
「悪かつたですね、料理下手で。・・・実は、オムレツは、大好きだつた祖母に教えてもらつた料理なんです。祖母が大好きだつたし、オムレツも大好きだったので、これだけはつまくいつたんですよ。」

「そうだつたのか・・・道理で・・・アツウ！」  
「・・・炊飯器の煙に触れるなんて、何年学生ですか、先輩。」

「辛辣な言葉！大丈夫？とかの一言も無いのか！？」  
「・・・呆れて何も言つ気になりません」

午後5時、やつとオムレツ（×2）が完成した。  
「・・・そういえば、マキ先輩つて連休中はずつと一人なんですね」

「そうだぞ」

マキ先輩は、ソファに寝そべりながら言つた。

「夕飯には早いんですけど、一緒に食べませんか？」

「えつ！？」

マキ先輩は、いきなり起き上がつた。

この人は、ひとつひとつの反応が面白い。

「だつて、クヌギさんが・・・」

「あの人なら、食べるもの見つけて食べますよ。ですから、一緒に食べましょう」

「・・・じゃあ・・・」

私と先輩はテーブルについた。

オムレツを口に運び始めてからしばらくして、私は口を開いた。

「・・・先輩は、ペットとか飼つているんですか？」

「んあ？ペット？・・・飼つてないぞ」

「飼つてみればいいのに。ポメラニアンとか、可愛いですよ。」

「・・・それは口口だけだろ？」

「でも、口口以外の犬だつて、見ている分は可愛いですよ？」

ピロリロン

「あ・・・メールです」

私はケータイのメールを開いた。  
姉からだつた。

『スマンスマン、夜までに帰れへんかもしれん。マキ君にも云え  
といつても

クヌギ

## 第十六話 ゴールデンウイーク一四四・2

私はケータイの電源を切つた。

「姉が、夜までに帰れないかも、だつて。」

「え」

「まあ、いいんじゃないですか？姉だつてもう一つですしお好き  
なようにさせとけば、そのうち帰つてきますよ。」

「ああうん、そうだな。ひとり立ちを考えてもおかしくない年頃  
だしな・・・アハハハハ」

「・・・お風呂、入ります？もう焚いてありますよ

「うむ。オムレツも食べ終わつたし、はいつてくるぞー！」

マキ先輩は脱衣所に駆けていった。

それにしても暇だ。

私はオムレツの皿を洗いに、キッチンへ向かつた。

・・・そうだ。先輩がお風呂に入つてゐる間に、アイスでも買  
に行こうかな。

私は二人分の皿を洗い、手紙を書いて家を出て行つた。  
アイスはコンビニが一番安いので、私は家の一番近くのコンビニ  
まで徒步で行くことにした。

「あれっ、安藤さん？」

「あ・・・未冬ちゃん、こんばんは。」

コンビニには、未冬ちゃんが居た。

「安藤さんは、明日からどこか行くの？」

「・・・いえ。先輩のお守りもありますし。」

未冬ちゃんは目を見開いた。

「先輩つて、マキ先輩！？」

「はい。旅行に置いていかれたみたいで・・・家で預かることが  
なつたんですよ」

「いーなーーーひりやましーーー！」

「まあ、先輩が居るだけ、」せやかで楽しいですよね

未冬ちゃんは田をぱちくりさせた。

「……そういう意味じゃないんだけど……」

「え？」

「だつて！あんなかっこいい先輩と連休一緒に過ごすんだもん、そりやーラブイベントとかに期待しないと……」

「……そういうものですか？」

「そういうものでしょう、女子の本能として。」

私は小首をかしげながらアイスのコーナーへ向かった。

「だつて、先輩とはただの部活仲間ですし、ラブイベントも何も・

・

「はあ・・・」りりやあマキ先輩たちも苦労するわ・・・

「・・・へ？」

「なんでもない。じゃあ、私は帰るね！バイバーイ

「はあ。」

私はアイスを3つ買って、コンビニを後にした。

家から一番近いコンビニと言つても、家からはだいぶ離れている。もう空は黒くなつてきている。

私が空を眺めていると、誰かとぶつかった。

「あ、すいません。」

「あ、杏仁さんだあ～」

楓先輩だった。

「楓先輩。こんばんは」

「こんばんはあ」

「・・・家にマキ先輩が居るんですけど、楓先輩も来ますか？」

「うん、いくいく～。」

じつして、楓先輩も家に来ることになった。

「ただいま～。すいません、遅くなりました」

「おかえりー杏仁、遅いぞお」

「ただいまあ～、マキちゃん」

「お、何だ。楓も居るのか？」

私はジャンパーを脱ぎながら言つた。

「はい。偶然見つけたんですよ」

楓先輩は、マキ先輩の耳元で何やら囁いた。

「何おうつ！そんな事は絶対に無いぞおお

マキ先輩は何やら焦っていたが、その光景は何だか微笑ましかつた。

夜まで散々騒いで、楓先輩は帰つていった。

こうして「ゴールデンウィークの一日は無事に終わった。

## 第十七話 ゴールデンウイーク一田田

「ゴールデンウイーク含め、私とマキ先輩の同居生活の一田田。

「マキ先輩、何ですか?」「コレは。」

私は鼻をつまみながら、その『コレ』を指差しながら言った。マキ先輩は私の目の前で、腰を丸めながら言った。

「…………ハンバーグ、です」

「…………これが?」

「…………うん」

私は、先輩がハンバーグだと言つた物を見つめた。どう見ても、ハンバーグには見えない。ただの、真っ黒な炭である。

真っ黒な炭はさて置き、この状況に到るまではたくさん(?)な事があつたのでござりますよ。

さて、少し遡ります。

その日は起きるのが遅く、もうお昼近くだった。

しかしその日は珍しく寝覚めもよく、ベッドから起き上がりつとした時だった。

ドッギヤー—————ン!—

一回から凄まじい爆発音。

私は急いで階段を下りた。

キッチンのほうをのぞきにいくと、そこにはアフロにちかい髪型をしたマキ先輩と、『(マキ先輩の自称)ハンバーグ』があつた。

そんなこんなで、現在に到る。

「・・・もう一度聞きますけど、コレが、何だって？」

「・・・ハン・・・バーグ・・・です」

自信なさ氣に田をそらすマキ先輩。

私はわずかな可能性にかけて、マキ先輩の額に手を当てた。平熱である。

「・・・マキ先輩？」

「は、はい」

私はにこやかに笑いかける。

「眼科の場所つて分かります？」

「え？ あ・・・はい」

「いつてらっしゃいな」

マキ先輩はしばらく「・・・？」といつ顔をしていたが、最後には「ハイ」と言つて家を出て行つた。

さて、と・・・。

朝からハンバーグつて言つのもなんだけど、作り直すか！  
姉が帰つてくるかもしれないし・・・一応、3個作つておひつ。  
何度も言つけれど、昔はいい姉だったしね。

昔は。

知つての通り、私はオムレツ以外はそんなにうまくできません。  
なので（「最初から使え」と思われるかも知れないが）、料理本  
を使うことにしました。

さてと。まずは、ひき肉だかをひつしてひつして・・・。  
あ、にんじんとかを入れてみてもいいかも。  
早速切ろう！

スペツ

指が・・・指が・・・ヒイイイー！！

いや・・・まだだーこのくらいで私のクッキングソウルは折れないと決めていたのよ。

私は傷口に絆創膏を貼ると、再びにんじんを切り始めた。  
それから数分経つて、無事ににんじんを切り終えることができた。  
よし、そしてこのひき肉だかをにんじんと一緒に揉んで、焼くの  
だな！

そうりや！

アツツイ！アツツイ！

いや・・・まだだ！このくらいでは、食の神様ナグーレ・コロー  
セ（殴れ・殺せ）に表彰された私のクッキングソウルは折れないぜ！  
私は火傷したところに水をつけると、再びひき肉だかとにんじん  
を焼き終え、ハンバーグを3つ完成させた。  
私がハンバーグの出来に感動しているときだった。

「ただいま、杏仁」

これは、マキ先輩。

別にそこまでよかつた。

二二 圖說（甲）

「腹減つたぞー、杏仁」

「今日の飯、なに？」

！！！？カオル先輩（汗）（汗）（汗）  
「おじやましまーす」

！！！？冬馬先輩（汗）（汗）（汗）（汗）

「ただいま」

！！！？櫻先輩（汗）（汗）（汗）（汗）（汗）

そして、先輩たちは私に言つのだった。

「杏仁、飯つ！」

## 第十八話 ゴールデンウイーク2日目・2

「ゴールデンウイーク2日目、午後2時。

「うわあ～・・・」

私は、その風景に目を細めた。

「久しぶりに来たよお、ここ」

楓先輩は、ぴょこぴょこと小さくジャンプする。

「本当久しぶりだなー。最後に来たのいつだっけ?」

力オル先輩は、ガラスをつつく。

「うおおおう！？杏仁、ハブが！ハブが！」

マキ先輩は、何だか絶叫している。

「杏仁、後でハブ対マンギースが・・・」

地味なことに興味しんしんな、櫻先輩。

「杏仁、あっちでは巨大ムカデ対ネズミが！」

グロテスクな妄想を抱いている、冬馬先輩。

「杏仁！あっちではマイケルとジャクソン君のショーが・・・」

妙にコドモっぽいショーを見ようとしている、カイ先輩。

そう。今日は、暇なので動物園+水族館に来ちゃつてます。

私は呆れ半分、冗談半分で先輩方に声をかけた。

「ほら先輩方！早く来ないと迷子になっちゃいますよ！」

「む、心配要らんぞ、杏仁。私たちはこいつ見えても17歳なのだ。

「そういうところが心配なんですよー！」

私は先輩たちを引つ張り、イルカトンネル（ガラスのトンネルの上を、イルカが通る）と一緒に通った。

何だかマキ先輩は、トンネルの天井を見ながらオドオドしてい

たが、私は気にせずに先を行つた。  
が、それが間違ひだつた。

みんな、見事にはぐれてしまつていていた。

「あれ、・・・先輩、・・・？」

私は、先ほどのマキ先輩のようにオドオドしながら道を進んだ。ケータイで連絡をとろうものの、私のケータイは通話機能がついていない。そして残念なことに、先輩たちのメールアドレスも知らない。

私は諦めて、人だかりの出来てゐる売店へ向かつた。

売店にも、先輩たちは居なかつた。

私はアイスクリームを食べながら道を進み、水族館の敷地から、動物園の敷地に移つた。

動物園の敷地にも人だかりが出来ており、ここだけ地球温暖化が起きてゐるんぢやないかと言うほどに暑かつた。おかげで、アイスクリームはすぐに液体になつた。

私はハブ対マングースの場所を練り歩き、グロテスクな最期のネズミが居る場所も練り歩いた。

が、先輩たちは一人も見つからなかつた。

私は動物園の敷地から出、マイケルとジャクソン君のショーやつてゐる場所を見に行くことにした。

マキは一人、「迷子」になつていた。

本人は無自覚だが、これは十分に迷子と言える。

「あんにーん、・・・？」

後輩の名を呼んでみるが、当然返事はない。

マキは諦めて、イルカのトンネルを再び通りぬける。

マキは、このトンネルは嫌いであつた。

嫌いというか、怖いのだ。

このトンネルのどこから水が漏れてくれたる……といつネガテイブな思考にとらわれすぎているからである。

マキは、売店を探した。

ひょっとしたら、のんびりアイスでも食べているかもしれない……などと考えながら。

でももし本当にのんびりアイスを食べていたら、ちやぶ台返しの1回や2回は許してほしい。

マキは首をひねり、辺りを見回す。

ユズキも楓もその他も、みんないなかつた。

マキは、もう色々と疲れたのでアイスを買おうと思つたが、残念なことに小銭も札も無かつた。

マキは諦めて、売店を離れた。

ハブ対マンガースの場所にもユズキたちは居なく、巨大ムカデ対ネズミの場所にも居なかつた。

マキは再び諦め、マイケルとジャクソン君のショーを見に行くことにした。

やつぱり、いない。

諦めて別の場所を探そうかな……。

そう思つたときだつた。

「杏仁ーー！」

マキ先輩だつた。

「・・・先輩・・・」

「杏仁、カオルたちは見つけたか？」

「いえ、まだです。先輩は？」

「私もまだだ」

「ですか。でも、もう少しうつくりでいいんじゃないですか  
？」私もコレ、見たいし……。」

私は先輩に笑いかけた。

「そつか、そうだな」

ダメだ、ダメだ。

ううーん、今言つてしまわないと……。

「ユズキ」

「はい？」

「すき、だ」

一瞬、時間が止まつた気がした。

・・・何たって？

六  
二  
先  
置  
力

私は心中で絶叫していた。

「そうですか」

私は一回間を置いて、言った。

「私も好きですよ」

マキの心の中は、明るい色に染まつた。

マキは、笑顔でうなずいた。

卷之三

楓は、妙に不機嫌になっていた。もちろん、本人は自覚無しだが。そう。楓は、マキの告白現場を見てしまったのだ。

楓には、「コズキには、マキの告白はお友達としてしか考えられない」とはわかっているのだが、妙に気にさわる。楓は嫌な気分を振り払い、マキ達の後を追おうとした。

そのとき、後ろから呼びかけられた。

「なんや、楓君やないか」

クヌギだった。

「クヌギさん・・・こんにちはあ～」

「なんや、迷子かいな? お姉さんについてきー!」

「もう杏仁さんたちは見つけたよお～。だから迷子じやなこよお

「あははは、なんやわうかいな。で、ビリヤリヒリモドキたん？」

「？」

「電車だよお～」

「へえ、コズキもセロイ手使いよんなあ」

クヌギが呟いたその時に、視界に力オルが現れた。

「あ、力オルちゃん」

「どー言つてたんだ? 探したんだぞ!」

そう言つた力オルに、クヌギが笑いながら言つ。

「力オル君、お連れさんの面倒はちゃんと見んとー!」

「は、はい、すみません・・・」

そこには、マキとコズキと、その他の部員が見えてきた。

「よーーうー! 探したぞ、楓たちよー!」

マキが各部員に挨拶をしていると、楓が寄ってきて耳元で囁いた。

「杏仁さん、へんなことしてないよね・・・」

「え・・・」

楓は何事もなかつたかのよつて、笑顔でコズキの元に走り去つていった。

## 第一十話 記憶消失のチョコレート、再来？

妙に長かったような気がする五日間は終わり、普通の日常がやってきた。

でも、気になる点がひとつ。

何だか、マキ先輩が変。変と言うか・・・いつも変なんだけど、「ゴールデンウィークの2日目の動物園 + 水族館から帰ってきたときから、いつもより遙かに変だつた。

内容はつまく説明できないけど、田をそらしたり、変にどもつたり・・・。

いつもなら傲然と胸を張つて、つざつたいくらいに自分を主張する人なんだけど・・・。

私は下駄箱を開け、靴を取り出して履いた。  
ぱこん、と音をたてて、下駄箱は閉まる。

私は玄関を後にし、（無駄に）長い廊下を歩き始めた。

・・・何だか、おかしい。

マキはそう感じていた。

当たり前である。

好きだと言つて、相手も自分を好きだと言つたのに、相手はいつもどうりに話しかけてきて、何も進展はないのだから。

（もしかして・・・軽く流された？）

マキは眉間に皺を寄せた。

考えられぬくもない疑問である。

マキはパイプ椅子から立ち上がり、マイティーをコップに注いだ。

キィイイ・・・

不審な音をたてて、ドアが開く。

ドアの影から、コズキの顔がのぞく。

「あ、マキ先輩。居たんですか？」

「・・・」「ホン。う、うむ。あ、朝のミーティングなのだ」

コズキはおかしそうに言つ。

「ミーティングって・・・先輩一人しかいないじゃないですか」

「む、むむ、朝の精神統一なのだ。」

「そうですか。・・・この前のアニメ見て分かつたんですけど、先輩たちって女声じやありませんか？」

「そ、そんな事はないぞ。私だってこんなに野太い声が・・・」

マキは、声が低くなるように頑張つてみた。

「あははは。そうそう、マキ先輩。描けつて言われてたアニメの下絵、出来ましたよ」

「う、うむ。ご苦労だつたな」

マキは、受け取ろうと手を伸ばす。

その時。

「あつ・・・・・」

手が触れ合つた。

マキは、反射的に変な声を出してしまつ。

しかし、コズキはそんなこと屁とも思つていないうで、

「あ、すいません。・・・私、もうすぐホームルームなんで帰りますね〜」

なんて言つて、明るく笑いながら去つていった。

マキは、心底「チャンスを逃した！」と嘆いていた。

そんなマキを、電線の上のカラスだけが慰めてくれていた。

放課後の放送室。

珍しいことに、今日の放送室には活氣が欠けていていた。

「・・・思うんだけど、この小説って『部活を主に書く小説』なんだが・・・『ゴールデンウイーク』で引っ張りすぎてその辺が曖昧になつてないか？」

と、カイ先輩。

「先輩、作者もその辺はよく分かってますから、ナメクジに塩をかけるようなことはしなくていいですよ」

「まあそうなんだが・・・で、あのじめじめ野郎はどうする?」

カイ先輩は、マキ先輩を指差しながら言つた。

私はマキ先輩に歩み寄つた。

「マキ先輩・・・？」

マキ先輩は虚ろな目をして、何やら呟いていた。

「マキ先輩、アテレコ・・・」

返答はなし。

「・・・まあ、いいや。杏仁」、アテレコやうつむ

冬馬先輩がそう言つたとき、マキ先輩はこきなりグランツと倒れこんだ。

「マキ先輩!？」

私がそう呼びかけたとき、部屋の隅にはたくさんのチョコレートがあつたことに気づいた。

## 第一十一話 大告白

藤山を問い合わせて抹殺した後、私は、マキ先輩の眠る保健室へ向かつた。

「失礼します」

保健の椿先生は居なく、マキ先輩の寝息だけが保健室に響いている。

私はベッドの方へ行き、マキ先輩の横に座った。

どれだけ乱暴に座つても、マキ先輩は起きそうにない。

あの後マキ先輩は、両手を振り上げて襲い掛かつてきたりしたが、櫻先輩のボルスキックによつて沈められた。

マキ先輩の頬は未だに赤い。それを見ただけで、酔つているということがわかる。

私はそつとマキ先輩のおでこに手を当てる。

・・・アツツイ！

ひょつとして・・・マキ先輩の暴走はチョコのせいではなく・・・熱？

そう思つと、急に藤山が氣の毒になつてくる。

私はハンカチを取り出すと、水にぬらしてマキ先輩のおでこに置いた。

何だか眠い。

私も寝ちゃおうかなあ・・・。

気づくと、マキは保健室のベッドの中だった。

頭がぼやつとする。

起き上ると、水にぬれたハンカチが落ちてきた。

よ一見ると、「安藤コズキ」と「マツ」一OPENで書いてある。

マキは、横を見た。  
そこには・・・

「ゆうきゅうひうきば・・・」

反射的に変な声が出た。

その変な声のおかげで、ユズキは目を覚ました。

「ん・・・・」

ユズキはこっちを向いて、何だか虚ろな目をしてくる。

「あ、先輩起きたんですねか」

「うむ・・・・」

「うーん・・・・」

ユズキは大きくのびをし、どこからか体温計を出してきた。

「はい。熱があるかもです」

「う、うむ・・・・」

マキは体温計を受け取った。

そして、沈黙がやってきた。

沈黙を破ったのは、ユズキだった。

「あの、マキ先輩

「・・・・・む

「最近様子が変でしたけど、何か私・・・悪いことでもしましたか?」

マキは、心底傷ついた。

本当に軽く流されたようだ。

「・・・・・もう一度だけ言つ

「何でしょう

「好きだ」

そしてまた、沈黙が訪れる。

しかし、ゴズキは何だか慌てている。

「あのあのあの・・・先輩、今日は・・・その・・・」

「なんだ」

ゴズキはカレンダーを指差しながら言った。

「今日は・・・」、エイプリルフールじゃないですよ・・・」

「知ってるよ。」

沈黙がまたしも訪れたとき、そこにかわいらしい声が割り込んだ。

「僕も、杏仁さんのこと好きだよ~」

「楓！（先輩）」

ゴズキとマキが、同じタイミングに後ろを向いた。

「俺も好きだぞ」

「櫻！（先輩）」

ゴズキとマキが、同じタイミングに右を向いた。

「俺も好きだぞ。最近は出番が少なかつたけどな

「冬馬！（先輩）」

ゴズキとマキが、同じタイミングに左を向いた。

「俺もだ」

「カオル！（先輩）」

ゴズキとマキが、同じタイミングに前を向いた。

「俺もだぞ、前回は全然喋ってないけど

「カイ！（先輩）」

ユズキとマキが、同じタイミングに斜め後ろを向いた。またまた沈黙が訪れたと思ったとき、ユズキが沈黙を破った。

「みなさん、今日は、エイプリルフールじゃないですよ・・・」

その声に、ユズキ以外の全員がツッこむ。

「知ってるよー。」

## 第一十一話 大告白（後書き）

「愛読有難う御座いました。

つまらない小説ですが、最後まで読んでくださった方々には、本当に心から感謝いたします。

表現が間違っていたり、漢字が間違っていても、作者にはツッコまなくてOKです。

かえつて、ナメクジに塩をかける的なことになってしまっていますので。では、またいつかお会いしましょう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5597d/>

---

高校アニメ製作部

2010年10月20日01時20分発行